

【問い合わせ先】
 島根県病害虫防除所〔担当：山本・永島〕
 TEL:0853-22-6772 FAX:0853-24-3342
 (島根県農業技術センター資源環境研究部病虫科内)

平成25年度 病害虫発生予察情報 注意報第1号 (タマネギべと病)

平成25年5月2日
 島根県病害虫防除所

タマネギべと病が県内各地で発生しており、発病程度の極めて高い圃場が確認されています。今後タマネギの肥大期に当たり、病勢の急速な進展が懸念されますので注意報を発表します。現地では圃場の発生状況を把握し、防除の徹底をお願いします。

記

1. 作物名 タマネギ
2. 病害名 べと病
3. 発生地域 県内全域
4. 予想発生量 多
5. 注意報発表の根拠



- (1) 4月30日の調査では、発生ほ場率が53.3%（平成15.3%）と平年を大きく上回り、平均発病株率は7.9%（平成0.83%）と過去10年間で最も高い。
- (2) 発病程度の高いほ場では、すでに薬剤による防除対策がなされているが、今後さらに感染が拡大する可能性は高い。
- (3) 今後の気象は本病の発生を特に抑制する要因とはならない。

6. 防除対策および防除上の注意事項

- (1) 感染防止のため、薬剤による徹底防除を行う。
- (2) 球の肥大期ごろには抵抗力が急速に低下し、病勢が進みやすい。

7. 薬剤防除（農薬登録内容は平成25年4月30日現在）

- (1) 種類および濃度

- 1) 発生が見られる圃場では、以下の薬剤が効果がある。

薬剤名	希釈倍率	使用時期	使用回数	系統名
リドミルゴールドMZ	1000倍	収穫7日前まで	3回以内	フェニルアミド系、ジチオカーバメート系
リドミルMZ水和剤	500～750倍	収穫7日前まで	3回以内	フェニルアミド系、ジチオカーバメート系
フォリオゴールド	800～1000倍	収穫7日前まで	3回以内	フェニルアミド系、クロロトリル
フォリオプラボ顆粒水和剤	1000倍	収穫7日前まで	3回以内	フェニルアミド系、クロロトリル
リドミル銅水和剤	400～600倍	収穫7日前まで	3回以内	フェニルアミド系、無機系化合物
フェスティバルM水和剤	750～1000倍	収穫7日前まで	3回以内	CAA、ジチオカーバメート系
フェスティバルC水和剤	600～800倍	収穫7日前まで	3回以内	CAA、無機系化合物
プロポーズ顆粒水和剤	1000倍	収穫7日前まで	3回以内	CAA、クロロトリル

- 2) 未発生圃場では、予防のために以下の薬剤が効果的である。

薬剤名	希釈倍率	使用時期	使用回数	系統名
ランマンフロアブル	2000倍	収穫7日前まで	4回以内	Qil
ドーシャスフロアブル	1000倍	収穫7日前まで	4回以内	Qil、クロロトリル
レーバスフロアブル	2000倍	収穫前日まで	2回以内	CAA
ベトファイター顆粒水和剤	2000倍	収穫7日前まで	3回以内	CAA、その他有機化合物
ブリザード水和剤	1200倍	収穫7日前まで	3回以内	その他の有機化合物、クロロトリル
カーゼートPZ水和剤	1000倍	収穫3日前まで	3回以内	その他の有機化合物、ジチオカーバメート系
ホライズンドライフロアブル	2500倍	収穫3日前まで	3回以内	その他の有機化合物、QoI
アミスター20フロアブル	2000倍	収穫前日まで	4回以内	QoI
アミスターオプティフロアブル	1000倍	収穫7日前まで	4回以内	QoI、クロロトリル
シグナムWDG	1500倍	収穫7日前まで	3回以内	QoI、SDHI
フロンサイド水和剤	1000～2000倍	収穫7日前まで	5回以内	酸化的リン酸化阻害剤
フロンサイドSC	1000～2000倍	収穫3日前まで	5回以内	酸化的リン酸化阻害剤
ヨネボン水和剤	500倍	収穫7日前まで	5回以内	無機系化合物
ダコニール1000	1000倍	収穫7日前まで	6回以内	クロロトリル
**マンゼブ水和剤	400～600倍	収穫3日前まで	5回以内	ジチオカーバメート系

注)**印の薬剤名は一般名であり、該当薬剤は複数あることから、使用に当たっては登録内容をよく確認する必要がある。

- (2) 散布時期および回数
発生圃場では、同一系統の薬剤の連用は避け、5～7日おきに2回以上防除する。
また、未発生圃場では7～10日ごとに予防散布を行う。降雨後はできるだけ早く薬剤散布を行う。

8. その他（病害に関する情報）

- (1) 発生病害の特徴
べと病とは、タマネギべと病菌（*Peronospora destructor* ペロノスポーラ デストラクター）というかびの一種によっておきる病害で、感染力が強いことからタマネギ栽培では最も恐れられている病害である。

1) 症状

本病に感染すると、葉に黄色がかった楕円形の大きな斑点ができ、やがて葉が枯死する。湿度が高いと病斑上には白い霜状のかび（分生孢子）がみられる。

2) 伝染方法

秋に植えられた苗がべと病に感染していると、3月下旬ごろになって葉が湾曲して

株全体が黄色くなり（このような症状を示す株を越年罹病株と呼ぶ）、後に株上に分生孢子とよばれるかびの孢子を大量に形成する。ここから飛散した分生孢子が健全な株に感染して、二次伝染を起こす。（4月下旬の状態）二次伝染株に分生孢子を形成し、さらに感染が広がる。（5月上旬以降）

(2) 防除

3月下旬ごろに見られる越年罹病株を抜き取ることが最も確実な方法である。ただし、べと病菌は感染力が強いため、1万本に1本、このような株が残っていても二次伝染を繰り返すことで、収穫期には多発生となる。このため、4月以降は薬剤による防除が必要となり、多発生が予想される場合には的確な薬剤防除が不可欠となる。

(3) 本県におけるタマネギべと病の注意報発表状況（警報の発表は無し）

発表年月日	発表時の状況
平成14年5月1日	発生圃場率33.3%、発病株率2.4%
20年5月1日	発生圃場率22.7%、発病株率6.2%
21年4月2日	越年罹病株発生圃場率16.7%、越年罹病株発病株率6.8株/1万株
22年4月5日	越年罹病株発生圃場率73.3%、越年罹病株発病株率18.9株/1万株